

D. G. リッチーにおける戦争と平和

尾崎 邦博

David George Ritchie, who is known as one of the leading philosophers of British Idealism, has been considered as one of key figures of the New Liberalism by some scholars. While highly praising Kant's theory of perpetual peace, he took sides with the British Empire in the Boer war. His case for the British war policy drew condemnation from the New Liberals, such as J. A. Hobson and J. M. Robertson. The purpose of this inquiry is to make plain the reason why Ritchie championed Britain's cause of the war, and to clarify the differences of view among the New Liberals about the war and the empire. Whereas Hobson regarded capitalism as a driving force of the war, and asserted that the British Government was engaged in an unjust war, Ritchie maintained that the British war policy was justified by the ethical judgment that every war should be discussed on its causes, ideals and purposes. According to him, the British Empire, which represented a higher stage of human society, was preparing the way for a federation of the world, which would absorb smaller nations into larger political bodies and prevent war within great areas.

Keywords: British Idealism, New Liberalism, Boer war, Imperialism, Just war theory

I. 緒言

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期にイギリスと南アフリカ地域のオランダ人系共和国との間で戦われたボーア戦争は、同時期の米西戦争と並んで帝国主義戦争の典型のように見做されている。このボーア戦争と、その勃発にいたるまでの南アフリカ地域におけるイギリスの帝国主義政策がイギリス国内において醸成した危機意識は、南アフリカ問題をめぐる様々な立場からの議論を沸騰させた。この時期にはこの問題にかんする文献が多く現れたけれども、その中で後世にいたるまで影響力をおよぼしたのは、やはりニュー・リベラリズムの思想的陣営からイギリス側の政策を批判した書物であった。そうした書物のうちで代表的なものが、J. A. ホブソン (John Atkinson Hobson, 1858-1940) の『帝国主義論』(1902)であることは言うまでもない。彼はそれ以外にもこの戦争に関して『南アフリカの戦争』(1900)や『ジゴイズムの心理学』(1901)といった書物を刊行していたし、彼の思想的盟友たる L. T. ホブハウス (Leonard Trelawney Hobhouse, 1864-1929)も『民主主義と反動』(1904)と題された帝国主義批判の書を刊行した。またニュー・リベ

ラリズムの陣営に属するとされることがある、自由党系の著作家 J. M. ロバートソン (John Mackinnon Robertson, 1856-1933) も、『愛国心と帝国』(1898)や『帝国の破滅』(1901)といった著書でイギリスの南アフリカ政策を容赦なく批判していた¹⁾。

さらに M. フリーデン (Michael Freedon) をはじめとする研究者によってホブソン等と並ぶニュー・リベラリズムの理論家として捉えられることのある、ブリテン観念論=イギリス理想主義の学派に属した哲学者 D. G. リッチー (David George Ritchie, 1853-1903) もまた、この時期にはこの戦争をめぐって幾つかの論説を残している²⁾。彼はエディンバラ大学で哲学や生物学を学んだ後、オックスフォードのベイリオル・カレッジに進んでこの学派の創始者たる T. H. グリーン (Thomas Hill Green, 1836-82) から重大な影響を受けた。哲学者としてのリッチーが、『ダーウィン主義と政治』(1889)や『ダーウィンとヘーゲル』(1893)といった著書の表題から推察されるように、観念論の立場から当時流行していた思潮である進化論を批判的に解釈しようと試みていたことは比較的よく知られている。また政治哲学の分野における代表作である『国家干渉の原理』

(1891)や『自然権』(1894)といった著書で、彼は自然権概念に依拠する旧い自由主義の個人主義的な政治哲学を批判していた。そのように旧い自由主義から新しい自由主義への哲学的転軸を根拠づけようと試みた点を考慮するなら、やはりホブスン等と同様に彼はニュー・リベラリズムの陣営に属すると見做され得るであろう³⁾。

ところが、リッチーのボーア戦争にたいする態度はホブスン達とは大きく違っていた。彼はこの戦争の最中に当時の倫理学協会運動を代表する機関誌の一つである『エシカル・ワールド』において1900年1月からこの戦争について自身の見解を述べた論説を寄稿していたのであるが、この論説がその機関誌の編集者にして常連の寄稿者であったホブスンからの辛辣な批判を招くことになる。またリッチーは『インターナショナル・ジャーナル・オブ・エシックス』の1901年1月号において「戦争と平和」と題された論説を執筆していたのだが、この論文はすぐさま反響を呼んで、同年4月号には前述したロバートソンによる「戦争の道徳的諸問題」と題された反論が掲載されることになる。このように帝国主義政策の批判者として知られているホブスンとロバートソンを相手に論戦を繰り広げた、という事実から推察されるように、リッチーはボーア戦争におけるイギリス側の政策を擁護していたのであった。

彼のそのような側面がこれまでの研究においてまったく気付かれていなかったわけではない。彼が属していたブリテン観念論=イギリス理想主義にかんする従来の研究はほとんどがグリーンを中心とするものであって、リッチーの思想が本格的に着目されるようになったのは、この学派の研究が活性化しはじめた1990年代後半になってからである。1998年にはそうした研究を牽引してきたP.ニコルソン(Peter Nicholson)の編集による全6巻のリッチー著作集が刊行されたし、リッチーの哲学と思想の本格的な研究もこの時期にはS.デン=オッター(Sandra den Otter)の『ブリテン観念論と社会解釈』(1996)によって大きく進展する。21世紀に入るとD.ウェインSTEIN(David Weinstein)は、論文「帰結主義的コスモポリタニズム」(2007)においてホブスン、ホブハウスそしてリッチーの三者の国際関係理論を功利主義に立脚するものとして取り上げて検討する。しかしボーア戦争をめぐるこの学派全体の態度を初めて論じたのは、D.バウチャー(David Boucher)であった。またリッチーの論敵となった

ホブスンの研究についてみておくと、P.ケイン(Peter Cain)の『ホブスンと帝国主義』(2002)では、この戦争をめぐるリッチーとホブスンとの対立がごく簡単に触れられていたし、近年ではフィンランド出身のT.サルカ(Timo Särkkä)が自身の博士論文『ホブスンの帝国主義』(2009)の中で同様にリッチーの立場について言及している。

同じニュー・リベラリズムの陣営に属すると見做されながら、なぜリッチーはホブスン達とこの戦争をめぐる意見が相違するにいたったのか。本稿ではこうしたリッチーの主張をホブスン等との比較も交えつつ詳しく検討して、彼がこの戦争を弁護するにいたった根源的な理由を探り出すことをめざす。そうした作業を通してボーア戦争問題をめぐるニュー・リベラリズム陣営内の思想的分岐の実相を明らかにしたい。

II. 背景としてのボーア戦争

まずは歴史的な背景としてのボーア戦争の概要をここで簡潔に整理しておきたい⁴⁾。オランダ人の南アフリカ地域への入植は17世紀後半に活発になり、オランダ東インド会社によってケープ植民地が設立された。19世紀になってウィーン会議以降にケープ植民地がイギリスの直轄領となると、多くのイギリス人入植者がそこに流入することになる。こうしたイギリスによる支配を嫌ったオランダ系移民は1830年代から40年代にかけて「グレート・トレック(Great Trek)」と呼ばれる内陸部への大がかりな牛車による移動を敢行し、ナタール共和国、トランスヴァール共和国、オレンジ自由国といった国家を建設する。ところが1860年代の自由国におけるダイヤモンド鉱山の発見と、1886年のトランスヴァールにおける金鉱の発見が、これらのオランダ系国家の運命を大きく変えることになる。

1870年代後半にディズレイリ内閣がトランスヴァールの併合を目論むが、抵抗するボーア人は80年12月にイギリスに宣戦布告して、第一次ボーア戦争が始まる。イギリス軍がボーア軍に敗北した結果81年3月にプレトリア協定が締結されて、トランスヴァールは独立を承認された。しかし金鉱のおかげで繁栄するトランスヴァールにたいしてイギリスは野心を捨てたわけではなかった。これらの地域にイギリス人の鉱山技師等が大量に流入すると、イギリスは彼等の保護を理由として干渉を開始する。トランスヴァー

ルが外国人に参政権を認めなかったために、イギリス側の不満は日増しに高まった。ダイヤモンド鉱山で財を築き、後のローデシアとなるトランスヴァールの北方地域の開発権を掌握した実業家 C. ローズ (Cecil Rhodes, 1853-1902) が90年にケープの首相に就任すると、彼はトランスヴァールの P. クルーガー (Paulus Kruger, 1825-1904) 大統領の打倒を企てて95年に「ジェイムスン侵入事件」をひき起こす⁵⁾。この企てが失敗に終わると、ケープ高等弁務官の A. ミルナー (Alfred Milner, 1854-1924) や植民地大臣の J. チェンバレン (Joseph Chamberlain, 1836-1914) は、外国人参政権問題を口実としてトランスヴァールへのいっそうの干渉を企ててゆく⁶⁾。こうした政策に憤慨したトランスヴァールはオレンジ自由国と共にイギリスに宣戦布告し、99年10月に第二次ボーア戦争の火蓋が切って落とされる。ボーア連合軍はイギリス軍相手に果敢に戦ったが、苦戦の末にイギリス軍が勝利し、この二つのボーア共和国は独立を奪われる。その後1901年にトランスヴァール共和国とオレンジ自由国は併合されて、ナタールやケープと共に自治領である南アフリカ連邦を構成することになった。

よく知られているようにホブスンによるこの戦争の分析は、戦争勃発へと到るこの地域の政治過程の背後には、国際的な金融の利害に後援された鉱山業資本家の策動がある、とみるものであった。彼によれば南アフリカ地域の真の経済的支配者は、ローズのようなイギリス人を含んではいるが、主としてユダヤ人から成っている「国際的金融業者のこの小さな連合体 (confederacy)」であった。この地域における目下の紛争の根本原因はそうした経済的支配者が政治的支配者たるべき必要性が増大したことに存するのであり、そうした支配者の代表と目されるローズとその盟友達は自身の営利計画のために政治を組織的に利用している。彼等はトランスヴァールの政府を転覆させてそこの支配権を確立するために、イギリスの武力と財力を注ぎ込むべく目論んでいた。このようにホブスンの眼から見て、イギリスは「鉱山所有者や投機家の小規模な国際的寡頭支配」を権力の座につけるために戦っているように思われた。

「ホブスン氏は、……資本主義を作用している一要因と見做している。」(Ritchie, 1900b, p.71. 以下リッチーからの引用では Ritchie を省略する) こう述べるリッチーは戦争中の1900年から『エシカル・

ワールド』誌に戦争問題について論説を寄稿し始める。ホブスンが編集に携わったこともあるこの『エシカル・ワールド』の基本的な論調が、「不公正で不必要な戦争に従事している」(1900a, p.19) 政府側に批判的であることに苛立ちながら、リッチーは政府の戦争政策を弁護しようとする。

リッチーのこのような政府にたいする明確な支持はいったい如何なる理由によるのか。彼のそうした態度は、一見したところ人道主義的な感情に駆り立てられたものであるかのようにみえる。彼はトランスヴァールのボーア人を偏狭な民族として激しく非難していた。当時トランスヴァールの政府は腐敗していると伝えられていたし、流入したイギリス人を含む非ボーア人居住者にたいする差別的な態度がしばしば伝えられていた。さらにボーア人は土着住民を残酷に扱っている、とイギリスの「宣教師団 (missionaries)」等によって伝えられていた。またそうした土着の「有色人 (coloured man)」は低廉な労働力を求めるトランスヴァールの資本家による無慈悲な搾取の危険にもさらされている、とリッチーは指摘している。

こうしてイギリス側の介入の目的の一つとして、トランスヴァールのボーア人による土着住民の虐待の防止と公平な処遇の実現が喧伝されることになる。このようにトランスヴァールの「土着住民問題 (the Native Question)」は当時戦争政策を正当化する根拠として使われて、「攻撃的な帝国主義」の擁護論の一つを形づくっていた。イギリスがボーア人国家にいっさい干渉しないのであれば、ボーア人は「野蛮状態 (barbarism)」へと退行して、彼等が虐待している土着住民によって殺される運命にある、とリッチーは述べている。このように彼は、トランスヴァールのボーア人とその国から特権を受けた資本家を放任しておくならば、彼等は際限なく土着住民や白人労働者を虐待し搾取するはずであり、そうした蛮行を抑止して土着住民等を人道的に保護するためにも、「帝国政府 (Imperial Government)」による直轄的な支配が必要とされる、と訴えていた。

リッチーはこの場合トランスヴァールのボーア人をイギリス人と対等である「文明化された」白人とは見ていないように思われるし、彼はそもそもトランスヴァール共和国を主権を有する独立国家として認めてさえいない。当時トランスヴァールはこの対立を国際的仲裁に付託しようとしたのであるが、チェンバレンはトランスヴァールにたいするイギリスの

宗主権を唱え出して、仲裁の要求を一蹴しようとした。こうしたイギリスがトランスヴァールにたいして宗主権を有するか否か、という問題は、1881年のプレトリア協定と1884年のロンドン協定の解釈にかかわっていた⁷⁾。そしてこの二つの協定がイギリス側の宗主権を規定しているか否か、という問題をめぐっては、チェンバレンや彼の見解を支持するリッチーと、トランスヴァール政府の見解を支持するホブスンとの間で意見が対立していた。

リッチーの見解は、チェンバレンと同様に、ロンドン協定はトランスヴァールを独立国家として承認するものではないし、それにたいして自治を保証しているものでもない、というものであった。このようにイギリス側の宗主権が認められている、と解釈する彼には、この戦争は弱小な共和国を力づくで併合するための帝国主義的な侵略行為ではなくて、主権を有さない属領のような地域の住民を暴政から解放するための、宗主権を有する側の正当な介入であるように思われた。しかしそうした見方だけでは、戦争そのものを肯定する論拠としてはまだ十分ではないであろう。次節以降では彼の戦争観をさらに深く掘り下げていきたい。

Ⅲ. リッチーと正しい戦争

ホブスンのような論者に欠落している、とリッチーに思われたのは、戦争の倫理的な意義についての考察であった。

先に言及したリッチーの論説「戦争と平和」は、前節でみたような文脈において執筆されたものである。ただし彼のこの論説は、戦争と平和についての論説というよりもむしろ、正しい戦争と正しくない戦争についての論説であると言った方が適切であるようなものであった。どのような戦争が正しいと言い得るのか、といった問いかけはもちろん新しいものではない。ここで彼は南アフリカ問題からいったん距離をおいて、倫理的な見地から歴史における戦争の意味について考察を進めてゆく⁸⁾。如何なる戦争が正しい戦争と言われ得るのか、という古来からある問いかけにたいする最もありふれた答えは、常識的に考えれば、自衛を目的とする戦争である、というものである。しかし彼は歴史的な実例を引き合いに出しながら、そうした答えの自明性を疑っている。そもそも特定の時代に存在する国民の現存している地理的な境界を、神の法によるかのように絶対

的に固定されていると見做し、それを改変しようとする企てをすべて侵略と見做すことは合理的であるのか、と彼は問いかける。ある国民が自身の生存のために始める闘争や戦争は、境界の向こう側の国民からみて侵略として現象することもあり得るから、ある戦争の「正邪 (right or wrong)」は侵略の形態を強調しすぎることによって判断されるべきではない。

ここでリッチーは、「我々の是認」は自衛の戦争だけに限定されるわけではないし、自衛はあらゆる事情の下で無条件に是認され得るわけでもない、と述べる。彼によれば、大きな国家による小さな国家の吸収が是認され得る場合があるし、主権者の権威を伴わずに始まった戦争が是認される場合もある。事後的にみればアメリカ植民地のイギリスにたいする戦争や、イギリスのナポレオンにたいする戦争は十分に是認されるべきものである。そしてそのような是認の可否の基準に関して彼は次のように述べている。「1770年から1870年にいたる1世紀の戦争についての我々の判断」は、「衝突している勢力 (forces) のうちのどちらが立憲的な統治や社会進歩を助長しているのか」(1902, p.155) ということ、言い換えれば、どちらが高度な文明を代表しているか、ということ如何によって定まる、と。そうであればここで彼は、高度な文明を代表する側による、高度ではない文明の側に立つ国家の吸収や併合は事情次第で是認され得るとみている、と解釈できよう。

そのように捉えるリッチーのみるところでは、そもそも戦争の根源的な本質とは、いたるところにある相容れない文明原理の間の衝突であった。「国王の神聖な権利と立憲的な統治」や「神聖同盟の原理とフランス革命の原理」(1902, p.155) といった対立関係が平和的な和解にいたることはまずあり得ない。そうした対立は「人間の発展の異なった段階の対立関係であるから」(1902, p.155) であって、場合によっては戦争という粗野な手段で解決されねばならないこともあり得る。そうした戦争とは彼によれば、歴史の中の巨大な運動の「付随物 (incidents)」もしくは徴候にすぎないものであった。

そうした見地からみるなら、現下のボーア戦争はリッチーによってどのように倫理的意義を判定されるのか。まず彼は、「社会の二つの両立し得ない型の間での闘争」としてのこのボーア戦争は「アメリカにおける北部と南部との間の恐ろしい闘争」と同じくらいに不可避的なものであった、と述べる

(1900a, p.20)。このように彼はボーア戦争はアメリカ南北戦争とまったく同じ型の闘争である、と述べて、ボーア戦争をアメリカ南北戦争とむりやり重ね合わせようとしている。そのように南北戦争における合衆国連邦政府と南部諸州との対立関係に重ね合わされる場合、ボーア戦争におけるイギリス側の大義は、南北戦争における連邦政府側の大義に対応させられる。

ボーア戦争の一方の当事者であるイギリスの植民地統治は、リッチーによれば18世紀のアメリカの植民者によって、また19世紀にはカナダにおける紛争によって、否応無しに学ばされた教訓のおかげで「信条ないし民族には関わりなく、白人住民の間で民主主義的な発展と実験」に最大の余地を認めるようになってきている。そのように経験から学ぶことで、イギリスは「白人植民地が完全に統御されないままにしておかれる場合に見出され得るよりも多くの保護を、文明化されていない、あるいは半ば文明化されている土着住民に確保している」(1900a, p.20)。そうした意味では、彼の眼から見てイギリスによる統治は「世界がこれまでのところ目にしてきている種類の最良の統治」にほかならなかった。こうしてそのように明言するリッチーは、イギリスの帝国主義政策を批判する周囲の声をものともせず、堂々とイギリス側に肩入れすることになった。イギリス側の大義は、南北戦争における連邦政府側の大義と同様に「真の民主主義の、文明の、そして進歩の大義」(1900a, p.20) たり得るように彼には思われたからである。

ロバートスンがこのようリッチーの主張の中に読み取った姿勢は、戦争の倫理的な問題について考察するにあたって、功利主義的な判断基準に依拠している、というものである。ロバートスンによれば、そうしたリッチーの立場はあらゆる戦争は「その道徳的な真価 (merits) にもとづいて」評価されるべきである、ということの意味していた (Robertson, 1901b, p.274)。そうした姿勢を批判してロバートスンが力説したのは、「義務の最高一般化である、とすべての倫理的な経験が断言している」「相互性 (reciprocity)」の原則の、戦争問題への応用の必要性であった。彼によれば如何なる侵略戦争にあっても、「通常は正しい行動を気にかけている人びとは、自発的に相互性という試験手段を適用する傾向を有する」はずであった (Robertson, 1901b, p.278)。そのことを分かりやすい喩えに直

すなら、「侵略者は自分が振る舞われることになるように振る舞っているのか」といった問いかけになる。

そのようにロバートスンが戦争の「正当性 (rightness) あるいは不正性 (wrongness) を決定するため」の倫理的な基準として「相互性の原則」を持ち出してくる点にリッチーは疑問を呈している。「相互性の原則」は諸個人の「利己性 (selfishness)」を抑制するための原理ではあるが、それは「ある国民内の諸個人の間関係に適用される」場合でさえ道徳的判断の完璧な原理ではあり得ない、と彼は述べる。ここでの彼の主張の要点は、諸国民は諸個人と同じ意味で「倫理的な権利と義務の主体」であるわけではない、ということである (1901b, p.495)。そうであれば諸国民の間で戦争が生ずる可能性が消え去ることは差し当たっては考えられない。戦争は諸国民が主権と独立を無条件に主張するのを止めて、裁判所や「自身の決定を強要するのに十分な警察ないしは軍隊」を有する、よりいっそう大きな「政治的有機体」に完全に吸収されてしまうまでは「究極的な控訴裁判所」の役割を果たし続ける (1901b, p.495)、とリッチーはみる。

IV. リッチーと正しい帝国

諸国民が主権を有しており独立しているかぎりは戦争発生の可能性は消え去らない、とみるリッチーが、平和の維持は「究極的な防護手段として規整された力を必要としている」(1901b, p.496) と述べたのはごく自然なことであった。彼がイギリス側を擁護したのは、彼がそうした大帝國が遂行する戦争を、力を以て戦争を終わらせて平和的な秩序を確立し得るものと見做したからである。本節では彼のそうした主張の根拠をさらに詳しくみていきたい。

リッチーによれば、独立している諸国民の間で戦争が防止され得るか否か、ということは唯一つの条件にのみ依存している。それはすなわち、諸国民が独立しているのを止める、ということである。彼はイングランドとスコットランドとの間にもはや戦争がない点や、かつては争っていたプロイセン人とハノーファー人が1879年以降はドイツ帝国の下で纏まっている点をその論拠として挙げている。近代諸国民の勃興の過程は彼によれば、「私的ならびに部族的な戦争と、対抗し合っている諸都市間の戦争の鎮圧」の過程でもあった。そうした場合には「より小さな

諸国民のより大きな政治体 (political bodies) への吸収」にほかならない過程は、「大きな領域内での戦争の防止」を意味していた (1902, p.169)。

19世紀は国民性の運動が人間の進歩において偉大な一歩を刻んだ世紀であった、とリッチーは述べる。しかし彼はそのようにして形成された近代的な国民、とりわけ「均質的な民族だけを代表している国民」(1902, p.157) が「政治社会の最高にして最終的な型」(1902, p.158) である、とは考えない。過去に目を転じれば、自律的で独立した都市国家は古代ギリシアや中世イタリアの「知的な偉大さ」に大いに貢献したけれども、そうした都市国家は結果的にはギリシアやイタリアを絶え間ない内訌に導き、外国による征服を招来し、最終的にそれらの政治的自由を喪失させた。また近代における代議制原理の発展は、多くの「自治的国民 (self-governing nation)」を生ぜしめてきているけれども、そのような「数多くの比較的小さくて独立した諸国民」の形成は、「粗野で野蛮な諸民族」が独自の発展の道を歩むままにしておくことを意味するのであれば、「人間社会の最高の型」を実現することにはならない、と彼は述べている (1902, pp.157-158)。

そのように述べるリッチーにとって人間社会のより高度な型を象徴しているのは、小さいが独立している諸国民ではなくて、「自治的で連合させられた共同社会がより先進的ではない諸民族を支配している」場合のような、少数の大きな帝国であった。そのような帝国は安定性の面で独立した諸国民よりも圧倒的に優っているし、さほど戦争の危険にさらされることなしに「世界の連合化 (federation) のための道を準備している」からである (1902, p.158)。そしてこのように同時代の帝国を評価するリッチーが、その模範を過去のローマ帝国に求めたのはまったく自然な成り行きであった。「名声と支配民族の富を増大させるための」領土の征服の結果にすぎない、「アッシリア、バビロン、ペルシア」といった古い時代の帝国とは異なって、ローマ帝国は「自身の臣民に法律と制度と公民性 (citizenship) を与えた」(1902, p.159) 最初の帝国であったからである。ローマ帝国は本質的には軍事的な専制支配体制であったけれども、それは「ヨーロッパ、西アジアそして北アフリカ」にそれらが享受したことのないような、そしてそれらがそれ以来有してはいないような平和をもたらしたのであった。

こうしてリッチーは、ローマ帝国による統治への

高い評価からインドにおけるイギリスの役割の礼賛へと飛躍してゆく。彼の眼から見れば、インドにおけるその帝国は地中海地域におけるローマ帝国の「現存している最も密接な類似物」(1902, p.159) なのであった。イギリスがインドの統治を放棄するならば、他の征服者や侵略者を誘うことになる「無秩序状態」へとインドの多くの民族を投げ戻す、という代償をイギリスは払わざるを得なくなる。そのような統治は、帝国が持続するためには「イギリス帝国と呼ばれているものを形づくっているすべての自治的共同社会 (self-governing communities) の連合 (federation) によって」共有されねばならない責任として⁹⁾、その帝国によって引き受けられるべきものであった (1902, p.160)。

貿易業者や宣教師が本国を離れて未開の土地へと活動範囲を拡げているリッチーの時代にあっては、そうした人びとの政府の側の不介入は「白人冒険家」の残酷な行為や文明の「代表者」の殉教を放置することになりかねない。遠く離れた土地で自国の国民が行っていることに目を閉ざす国家は、不介入という尤もらしい言い訳によって自身の責任を回避している。そして「介入、勢力圏、あるいは領土の取得」(1902, p.163) といった政策はそうした見地からも評価されるべきものである以上、南アフリカにおけるイギリスの政策は彼の目からみれば毫も非難には値しない。イギリスの介入は「非オランダ系民族の人びと」の権利保護のためのものであって侵略にはあたらないからである。

南アフリカが平定される時、すべての白人民族は平等な足場の上に置かれるであろうし、土着住民もボーア人の支配下で有しているよりもはるかにましな法的地位を獲得することになる、と述べながらリッチーは、こうしたボーア人共和国の併合をめざす政策の駆動力として、「グレーター・ブリテン」の理念をあげる¹⁰⁾。こうして彼はこの理念が必然的に伴う「共通の責任の感情」を、「百年前にカントが見た」ような「地上のますます大きな領域にわたって、専制支配も停滞も伴うことなく、世界において戦争を減少させて平和を確保する唯一の手段である」、連合化の理念の培養土と見做してゆく (1900a, p.20)。

V. リッチーとカント平和論

このようにリッチーが世界の理想的な統治形態とみたものは、いわゆる「帝国連合 (imperial

federation)」のそれであったと言ってよい¹¹⁾。古代世界では専制的な統治が戦争を防止して平和を実現する唯一の手段であったのであるが、近代社会にあっては「代議制的で連邦的な統治」が他の可能性を示している、と彼は言う。ドイツのような「連邦型帝国 (federal empire)」、*「連邦共和国」*、文明の程度に応じて自律的に統治される属領を伴った「自治的共同社会の一つの連邦」(1902, p.161) といった種々の形態をとり得るこの「連合」は、彼によれば「代議制統治が中世の偉大なる政治的発明であったように」、単なる連盟 (leagues) あるいは同盟 (confederations) とは異なる、近代の最も重要な政治的発明なのであった。

こうしたリッチーの「世界の連合体 (federation of the world)」(1894, p.279) による統治の理想については、彼の大学の同僚であり、ライプニッツの『モノドロジー』を英訳したことで知られる R. ラッタ (Robert Latta, 1865-1932) が回想録の中で証言している。ラッタによれば、リッチーは狭隘なナショナリズムにたいしても漠然としたコスモポリタニズムにたいしてもあまり共感を抱いてはいなかった。リッチーは、永続的な普遍的平和は独立している諸国民の間での条約によって確保されることはあり得ず、究極的には一つの主権しか有さない、自己統治的な諸国家の連合体の設立によってのみ確保され得る、と考えていたようである (1905, p.48)。

ここで永続的な普遍的平和を実現するための、自己統治的な諸国家の連合体の創設といった理想を耳にするなら、ただちにカントの平和論が想起されよう。実はリッチーはカントの『永遠平和のために』(1795) (以後『平和論』と表記する) の英語訳の企てに深くかかわっていた¹²⁾。リッチーが死去した年である1903年に、ロンドンのスワン・ソネンシャイン社からカントの『平和論』の英語訳が刊行されている。『平和論』の英語訳の試みはこれが初めてであったわけではないが、前置きを担当したラッタは、この訳書は「原文と同じようにすべての註を含んでいる」唯一の英語への「完訳 (complete translation)」である、と述べている (Kant, 1903, p.v)。ところでこの1903年の訳書の訳者は M. キャンベル・スミス (Mary Campbell Smith) という女性であった。彼女はこの訳書に戦争と平和の問題を歴史的に考察し、戦争と平和をめぐる思想史の中にカントの議論を位置づけようと試みた、かなり長めの序論を付しているのであるが、彼女について詳しいことはよく

分らない。しかしながらこの訳書の成立の事情については、ラッタによる前置きが参考になる。彼によれば、この訳書をキャンベル・スミスに奨めたのは、この訳書の刊行の直前に世を去っていたセント=アンドルーズ大学の「リッチー教授」であった。もともと彼は「戦争を止めさせる」「可能性に関する最近の討議との関係におけるカントの著作の価値を示す前置き」(Kant, 1903, p.v) を寄せることになっていたのだが、彼の「早すぎた死」によって、大学の同僚であり学問的盟友であるラッタが代わりに前置きを執筆することになったのである。

しかしそのようにリッチーがカントの平和論を高く評価していたとしても、彼の連合体の構想とその実現のための方法は、カントの理想とはひどく異なっている。カントの唱える「普遍的連合 (universal federation)」(1902, p.170) のための計画は、あらゆる国家は「共和制的」な政府を有さねばならない、という規定を含んでいた。しかしリッチーは、こうしたカントの主張を「一つの代議制的な政府を意味しているにすぎない」(1902, p.170) と強引に解釈する。文明化された諸国民の連合体は諸国民がすべて民主的かつ立憲的に統治されている場合にのみ実現可能である、という見方は理念としては正しいが、立憲的な統治には適していない地上の部分が多く残っている、と彼は述べる。彼にとってはカントの理念は未来において何時か到達されるべき永遠の終局的理想状態であった。彼が生きている世界には文明化された地域と「野蛮」な地域という歴然たる区分があるのであって、後者の地域では少数派の白人が奴隷制を復活させたり、自由な制度の伝統を有さない多数派の黒人が無秩序な統治を行ったりする懸念が消え去らない。彼にとっては、こうした世界で責任ある統治を確立し、暴政や蛮行を抑止しつつ、公正で平和な秩序を実現し得るような連合形成をめざす「帝国」による力の使用は、理想へと一歩ずつ近づくための手段なのであった。

そうであれば、このように力説するリッチーの立場からみた、戦争の究極的な倫理的意義は明白であろう。世界史において戦争の衝撃を介さずに生じた連合や連邦はない、とさえ彼は言い切っている。彼によれば、平和国家の象徴の如きスイスにおいてさえ、保守的なカントンがカトリック的伝統を護持しようとしたために、1847年に内戦が生じたのであり、その結果進歩的な勢力が勝利することで平等な権利と永続的な平和が漸く実現したのであった。このよ

うに戦争を抑止して平和を確保するための世界の連合体の設立を促進するような戦争こそが、彼にとつては最も価値ある戦争なのである。

VI. 結 語 — ホブソンの帝国連合論

自治的な共同社会が「先進的ではない諸民族」を支配している場合にみられるような少数の「大帝國」は、自由放任の段階よりも高度な段階を表わしている、と唱えるリッチーの立場にたいして、やはりロバートソンは次のように疑問を投げかけていた。そうした帝国のような「より高度な型」は、はたして「故意の征服および威圧によって到達され得るのか」(Robertson, 1901b, p.285)、と。ロバートソンもホブスンも、リッチーが強調していた、戦争を抑止して平和を確保し得るような帝国による世界の連合体形成の意義を頭から否定しているわけではない。ロバートソンが批判していたのは、リッチーが「征服による力づくの統一化は、……結局は進んでする連合化と同じくらいに有益な事柄である」(Robertson, 1901b, p.275) と断言していた点であった。

またホブスンはその代表作『帝国主義論』の第 2 部第 6 章「帝国連合」において、帝国内諸地域の自治の発展という趨勢が、対等な諸国家から成る連合体の形成の基礎となり得る、とみて、あるべき帝国の将来像を模索していた。帝国内の諸国家が、共通の安全と繁栄のために自発的に連合を形成するのであれば、そうした連合は「将来における文明化された諸国家のより広範な連合」(Hobson, 1902, p.351) に向けた一歩となるかもしれない。そうした見地からみれば、彼が批判している帝国主義とは、植民地自治と衝突して理想的な連合の形成を不可能ならしめる政策にほかならなかった。しかしながら、そうした彼の希望の曙光は既に戦争の現場である南アフリカ地域において見出され得るものであった。それまでにケープ植民地においてもナタールにおいても自治が発展してきていたし、「二つの白人民族」の間で「民族的敵意 (racial animosity)」が緩和されるならば、「南アフリカ連邦」はイギリスの植民地がこれまでに有したよりもはるかに広範な自治を享受し得る (Hobson, 1902, p.349)、と彼はみている。

このようにホブスンはイギリス側の政策とリッチーによるその擁護論を批判する一方で、南アフリカ

の将来について現実的な展望と代案を欠いていたわけではない。彼は、二つのボーア人共和国がイギリスによって屈服させられる場合を見越して、そうした場合に望み得る最善の解決策を準備しようとした。イギリスがボーア人共和国に勝利するとしても、イギリスは南アフリカ地域における連邦形成の問題に否応無しに直面させられるはずであるからである。

ホブスンによれば、南アフリカ地域における連邦形成の問題はこの時代にはじめて注目されたわけではない。既に 1858 年、当時のケープ植民地総督 G. グレイ (Sir George Grey, 1812-98) は、「ケープ植民地、ナタール、そしてオレンジ自由国の立法府」を含む「連邦的結合 (federal union)」の形成の構想を本国政府に提案していた。ホブスンはこの構想をかなり好意的に評価している。グレイの構想はホブスンによれば、「幾つかの連邦を形成する国家における統治形態の最も広い多様性」を認める「連邦的自治 (federal home rule) の計画」と呼び得るものであった (Hobson, 1900a, p.298)。帝国主義者でありながら「連邦主義者 (federationist)」でもあったグレイにとっては、南アフリカにおける連邦形成は帝国の圧力によって押しつけられるべきものではなくて、自治を実践する構成単位の同意と善意に立脚するべきものであった。軍事的な征服の結果として連邦化が上から押しつけられるのであれば、そうした連邦化は間違いなく長続きしない、とホブスンは強調する。将来の南アフリカにおける諸国家の連邦形成は、自発的で内発的な原動力によるものでなくてはならないし、利害と感覚の共同性、「心情 (hearts) の結合」についてははっきりとした認識に基礎を置かねばならない、と彼は述べている。

これまでみてきたようにリッチーとホブスンは、暴政や専制が横行する世界秩序を克服し、戦争を防止して平和を確保し得るような連合体形成を理想としていた点では共通していた。両者の相違は、前者が理想の実現のためには帝国の力の使用も辞さない連合形成に期待を寄せたのに対して、後者は連合形成はその構成単位の自発的な同意と協同に立脚するべきである、と訴えた点にあると言える。そしてこの戦争の後ホブスンは、そうした連合構想をいっそう発展させて、戦争を防止して平和を確保し得るような「自由な諸国家の連合体というカントの観念」(Hobson, 1908, p.19) を実現するべく、国際的な統治機構の設立を真剣に提唱してゆくことになる。

注

- 1) ロバートソンは当時『モーニング・リーダー』の通信員として南アフリカに滞在し、特にイギリス軍による現地農家の破壊や財産の没収といった悪行について重点的に報告していた。『帝国の破滅』はその報告をまとめたものである。
- 2) ブリテン観念論=イギリス理想主義についての研究は1990年代以降活況を呈してきている。この学派の全体像を捉えようとした試みとしては Mander (2010) を参照。
- 3) リッチーの伝記的な事実に即して一言しておくなら、彼は1887年から88年にかけてアイルランド自治問題に関して自治に賛成する W. E. グラッドストーン (William Ewart Gladstone, 1809-98) の支持を公的に明言していたことを除けば、ホブソン達ほど当時のイギリス自由党を支持する立場を明確にしたことはなかった。それどころか彼は短期間ではあるが一時はフェビアン協会の会員でもあったから、自由党員ないしは自由党の積極的な支持者という意味でホブソン等と同じ程度にリベラル=自由主義者であった、とは言えないかもしれない。
- 4) 南アフリカ戦争とその背景の概要を知るための邦語文献としては、市川 (1982)、岡倉 (2003)、佐伯 (2003) 等が有益である。
- 5) 「ジェイムスン侵入事件 (the Jameson Raid)」とはトランスヴァールのイギリス人を煽動して反乱を起こさせるべく、ローズの盟友であった植民地政治家 L. S. ジェイムスン (Leander Starr Jameson) が率いる集団が侵入を企てた事件である。
- 6) もともとリッチーとミルナーは産業革命についての講義で知られる A. トインビー (Arnold Toynbee, 1852-83) を囲む政治問題研究のためのサークルに属していた。リッチーはこのミルナーを冷静で廉直な人物者として賞賛している。
- 7) プレトリア協定とロンドン協定がトランスヴァールにたいするイギリスの宗主権を認めている、とみる立場にたいしてホブソンは『南アフリカにおける戦争』の第1部第18章と、1900年3月24日の『エシカル・ワールド』に掲載された論説「リッチー教授への返答」において詳細に批判を加えている。Hobson (1900a) および Hobson (1900e) を参照。
- 8) D. ウェインSTEIN は戦争の意義に関するリッチーの評価法を帰結主義的と見做しているけれども、リッチーは戦争の倫理的意義を単なる結果だけで評価しているわけではない。戦争の「成功 (success)」を評価基準の一つとしている点では確かに彼の姿勢は帰結主義的であると言えるけれども、同じくらいに彼は戦争遂行国の大義や目的や理想も重要視しているように思われる。少なくとも当時進行中であった戦争についてはそうである。Weinstein (2007b) を参照。
- 9) リッチーのこうした主張は「白人の責務 (the White Man's Burden)」と呼ばれる帝国主義的統治の擁護論の一変種と言えるかもしれない。

- 10) 「グレーター・ブリテン」の理念の思想的系譜については、D. ベル (Duncan Bell) の詳細な研究がある。Bell (2007) を参照。
- 11) 帝国連合論の系譜についても、D. ベルの研究書が詳しく扱っている。
- 12) なぜか先に挙げておいた先行研究では、リッチーがこのようにカント平和論の英訳にかかわっていた事実にもまったく触れていない。

参考文献

- 市川承八郎 (1982), 『イギリス帝国主義と南アフリカ』 晃洋書房, iii, 259p.
- 岡倉登志 (2003), 『ボア戦争』 山川出版社, 240p.
- 尾崎邦博 (2007), 「J. A. ホブソンにおける国際政府構想の展開」, 『経済科学』 第55巻第2号, pp.51-68.
- 佐伯 尤 (2003), 『南アフリカ金鉱業史』 新評論, v, 336p.
- Bell, D. (2007), *The Idea of Greater Britain: Empire and the Future of World Order, 1860-1900*, x, 321p.
- Bell, D. (ed.) (2007), *Victorian Visions of Global Order*, Cambridge University Press, ix, 297p.
- Boucher, D. (1994), "British Idealism, the State, and International Relations", *Journal of the History of Ideas*, vol. 55, no. 4, pp.671-694.
- Boucher, D. (2009), *The Limits of Ethics in International Relations*, Oxford University Press, vii, 421p.
- Boucher, D. & Vincent, A. (2000), *British Idealism and Political Theory*, Edinburgh University Press, viii, 248p.
- Boucher, D. & Vincent, A. (2012), *British Idealism: A Guide for the Perplexed*, Continuum, viii, 196p.
- Cain, P. (2002), *Hobson and Imperialism*, Oxford University Press, ix, 320p.
- Den Otter, S. M. (1996), *British Idealism and Social Explanation*, Oxford University Press, x, 250p.
- Freeden, M. (1978), *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform*, Oxford University Press, xi, 291p.
- Hobhouse, L. T. (1904), *Democracy and Reaction*, T. F. Unwin, vii, 244p.
- Hobson, J. A. (1900a), *The War in South Africa*, Nisbet, viii, 324p.
- Hobson, J. A. (1900b), "Capitalism and Imperialism in South Africa", *Contemporary Review*, vol. 77, pp.1-17.
- Hobson, J. A. (1900c), "Capitalism in South Africa", *Ethical World*, vol.3, 10 Feb., p.84.
- Hobson, J. A. (1900d), "Will the natives gain by the war?", *Ethical World*, vol. 3, 24 Feb., pp.114-116.

- Hobson, J. A. (1900e), "A Reply to Professor Ritchie", *Ethical World*, vol. 3, 24 Mar., p.179.
- Hobson, J. A. (1900f), "The Responsibility of Mr. Rhodes", *Ethical World*, vol. 3, 25 May, pp.323-324.
- Hobson, J. A. (1900g), "John Brown's Body", *Ethical World*, vol. 3, 16 Oct., p.639.
- Hobson, J. A. (1901), *The Psychology of Jingoism*, Grant Richards, 139p.
- Hobson, J. A. (1902), *Imperialism: A Study*, Nisbett, vii, 400p.
- Hobson, J. A. (1908), "The Unpopularity of Peace Movements", *South Place Magazine*, vol. 14, no. 2, pp.17-19.
- Hobson, J. A. (1938), *Confessions of an Economic Heretic*, Allen & Unwin, 217p.
- Kant, I. (1795), *Zum ewigen Frieden: Ein philosophischer Entwurf*, Nicholobius, 56p.
- Kant, I. (1903), *Perpetual Peace*, tr. by M. Campbell Smith, Allen & Unwin, xi, 203p.
- Long, D. (1996), *Towards a New Liberal Internationalism: The International Theory of J. A. Hobson*, Cambridge University Press, xi, 273p.
- Mander, W. J. (2011), *British Idealism: A History*, Oxford University Press, xix, 605p.
- Ritchie, D. G. (1894), *Natural Rights*, Allen & Unwin, xvi, 304p.
- Ritchie, D. G. (1900a), "Another View of the South African War", *Ethical World*, vol.3, 13 Jan., pp.19-20.
- Ritchie, D. G. (1900b), "The South African War", *Ethical World*, vol. 3, 3 Feb., pp.70-71.
- Ritchie, D. G. (1900c), "The Transvaar War", *Ethical World*, vol. 3, 17 Feb., p.110.
- Ritchie, D. G. (1900d), "Ethical Judgment as to the War", *Ethical World*, vol. 3, 3 Mar., pp.19-20
- Ritchie, D. G. (1900e), "Mr. Hobson's Book and the Coming Settlement", *Ethical World*, vol. 3, 10 Mar., pp.145-146.
- Ritchie, D. G. (1900f), "South Africa", *Ethical World*, vol. 3, 31 Mar., p. 206.
- Ritchie, D. G. (1900g), "John Brown's Body", *Ethical World*, vol. 3, 29 Sep., p.613,
- Ritchie, D. G. (1901a), "War and Peace", *International Journal of Ethics*, vol. 11, pp.
- Ritchie, D. G. (1901b), "The Moral Problems of War — In Reply to Mr. J. M. Robertson", *International Journal of Ethics*, vol. 11, pp.493-505.
- Ritchie, D. G. (1901c), "A Further Reply to Mr. J. M. Robertson", *International Journal of Ethics*, vol. 12, pp.113-114
- Ritchie, D. G. (1902), *Studies in Political and Social Ethics*, Swan Sonnenschein, ix, 238p.
- Ritchie, D. G. (1905), *Philosophical Studies*, Macmillan, ix, 355p.
- Ritchie, D. G. (1998), *Collected Works of D. G. Ritchie*, 6 vols., ed. by P. P. Nicholson, Thoemmes.
- Robertson, J. M. (1898), *Patriotism and Empire*, Grant Richards, 208p.
- Robertson, J. M. (1901a), *Wrecking the Empire*, Grant Richards, xvi, 313p.
- Robertson, J. M. (1901b), "The Moral Problems of War", *International Journal of Ethics*, vol.11, pp.273-290.
- Robertson, J. M. (1902a), *The Truth about the War: An Open Letter to Dr. A. Conan Doyle*, New Age Press, 48p.
- Robertson, J. M. (1902b), "A Further Rejoinder to Professor Ritchie", *International Journal of Ethics*, vol.12, pp. 226-227
- Särkkä, T. (2009), *Hobson's Imperialism: A Study in Late-Victorian Political Thought*, University of Jyväskylä, 207p.
- Weinstein, D. (2007a), *Utilitarianism and the New Liberalism*, Cambridge University Press, xii, 221p.
- Weinstein, D. (2007b), "Consequentialist Cosmopolitanism", in D. Bell (ed.), *Victorian Visions of Global Order*, pp.267-290.

(名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程単位
取得退学)